

教育講演 5

みんな似すぎ！唾液腺の細胞診像

森 智紀，神尾百香，中村桃子，畝原 璃夢，越智真悠，大上由加里，
青木知恵，黒田真理子，三島聡子，丸橋由加里，清水智美，金子佳恵，
石田克成，有廣光司
広島大学病院 病理診断科

唾液腺細胞診は推定診断が難しい領域の一つである。その要因は、原発性・転移性の腫瘍性病変のみならず炎症性・感染性を含めた非腫瘍性病変の推定診断が求められること、多形腺腫やワルチン腫瘍をはじめとする様々な良性腫瘍、粘表皮癌や腺様嚢胞癌など数多くの多彩な組織型が分類されていること、唾液腺癌の頻度がまれであり、日常業務で経験頻度が少ないこと、そして、これらの数多くの組織型において細胞形態学的特徴が重複することが挙げられる。

例えば、全唾液腺腫瘍の約6～7割を占める多形腺腫の典型像では、様々な形態を示す腫瘍性筋上皮細胞を種々の割合で集塊または孤立散在性に認める。また、粘液腫様間質や軟骨基質の存在は特異的である。これらの所見を認めた場合は、多形腺腫を推定することに問題はないであろう。しかしながら、多形腺腫で見られる基底膜様物質は腫瘍性筋上皮細胞が関与する様々な唾液腺腫瘍で認められる。また、粘液腫様間質が乏しく、腫瘍性筋上皮細胞が単調な非典型的な細胞像を示す多形腺腫は良性腫瘍では基底細胞腺腫、悪性腫瘍では基底細胞癌や腺様嚢胞癌と細胞像が酷似することがあり鑑別は容易ではない。従って、唾液腺細胞診では、頻度が高い腫瘍の特徴は確実に理解しておく必要がある。

唾液腺腫瘍の細胞診は、Papanicolaou染色を中心とした形態観察に加え、May-Giemsa染色の併用が有用である。例えば、May-Giemsa染色で赤色の異染性を示す基底膜様物質や鮮赤色の異染性を示す球状硝子体が明瞭に観察される。細胞像が類似する唾液腺腫瘍の細胞診において、細胞像だけで無理に推定せずに、採取部位や年齢などの臨床情報や臨床病理学的な特徴を加味し推定診断を進めることが重要である。また、唾液腺腫瘍において特異的な遺伝子転座や腫瘍性蛋白の存在が徐々に明らかになり、免疫染色やFISHのような補助診断を施行することがこれからの唾液腺診断には重要である。

本講演では、日常的に遭遇する頻度の高い唾液腺腫瘍の細胞像における基本的な特徴を提示しながら、細胞学的特徴が重複し、似すぎる細胞像で鑑別に有用となると診断ポイントについて述べていく。